

平成 29 年度全国高等学校総合文化祭(宮城県大会)派遣決定「文芸」

11月に行われた第40回沖縄県高等学校総合文化祭文芸・図書部門における文芸研究大会で、上位入賞を果たした仲松佐也伽さん(2-2)が来年7月31日から4日の間宮城県仙台市で開かれる第41回全国高等学校総合文化祭文芸部門「詩部門」へ派遣推薦が決定しました。

仲松さんは「作品を提出して数日後県内の高校生の作品が載った作品集が送られてきました。それを見たとき、愕然としたのを覚えています。私と同じ10代の人たちがこんなにもみずみずしい感性と鋭い観察眼をもっているのかと驚きと嫉妬と嬉しさでしばらく動けなくなりました。私は井の中の蛙だったんだと気づき、作品集に載った自分の詩を恥ずかしく思いました。だから、選ばれたことを知ったときは、まさかの出来事が起こったと私自身が一番驚きました」とありました。



仲松さんは、お父さんの影響で小学校3年生の頃から文章を書くことに親しみ、詩の感覚は吉田拓郎や西城秀樹といった昭和の歌手の詞で培われたそうです。「彼らの“次にどんな言葉がくるのだろう”と思わせる作品が好きです」と話す表情は、思慮深さと芸術に浸る喜びが充ち満ちています。

仲松さんは将来作詞家を目指しており、現在の詞の傾向に対して「単に“言葉を紡ぐこと”という点で疑問を持っている」とも話してくれました。

『傷だらけの君へ』という題名の詩が今回推薦を受けた作品です。中学校の頃の同級生との関わりを題材に、思春期の傷つきやすい繊細な心の動きを大空とその色の変化に比喻し、雨水の一滴を生命と希望に表現した詩です。

中学校の3年間を文学が好きな友人たちと過ごし、その影響で詩作を始めたそうです。校長室で、お互いの好きな作家の話や文体や表現方法について時が経つのを忘れ話を交換することができ、私も思わず若い頃浸った作家や作品について話していました。

大会出場への抱負では「(派遣に)選ばれたからには、自分の作品に自信を持たなければなりません。詩の題材になってくれた友人にも感謝をして、堂々と宮城県へ行ってきたいと思います」と読書が好きで鋭い感性は美しい言葉を選びながら目を輝かせて話してくれました。